



尾道商業会議所記念館

第44回企画展示

漁町のフォークロア

2023（令和5）年5月26日（金）～10月25日（水）

展示解説



明治後期の手彩色写真絵葉書より（尾道学研究会蔵）

町には輪のように灯がついた。市場が近いのか、頭の上に平たい桶を乗せた魚売りの女達が、「ばんより！ばんよりはいいやんせんか」と呼び売りながら通って行く。――

山口県下関（北九州市との説もあり）に生まれ、10代の多感な時期を尾道で過ごした作家・林芙美子の短編小説『風琴と魚の町』（1931・昭和6年発表）に綴られている一節です。

本作は、行商人の両親に連れられて来た主人公の少女が目当たりした、山陽本線沿線のにぎやかな港町の風景と、そこでの小さな物語を、時におかしく、時に悲しく書いています。その舞台こそ芙美子が少女時代を過ごした尾道の町であり、題名の「魚の町」は尾道のことです。

近世期から商都として栄えた本市は、瀬戸内海のほぼ中心部に位置し、穏やかな水域を有する良港として漁業も盛んに行われてきました。

その歴史を現在も身近に感じさせてくれる風景のひとつが、先の小説に登場する「ばんより（晩寄り）」と呼ばれる魚売りの人々です。

本展示では、まず、近世期から現在までに行われてきた漁業の営みを概観し、食材の宝庫尾道の海のめぐみを紹介します。そして、タイトルともなっているフォークロア（民俗学）の視点から、海と共に生きてきた人々の暮らしと変化にも焦点を当てていきたいと思ひます。

尾道は穏やかな瀬戸内海に面したその地理的条件から、往古より漁業を営む人々が住んでいました。

1816（文化13）年に編まれた『尾道志稿』によると、土堂町西浦辺に漁業従事者が多く住む漁師町があり、各地で魚市が開かれていました。また、尾道から幕府に提出した文書の中には土産物として雑喉鮓・小魚腸塩辛・鮓塩辛・鮓・鱻・鱸等の海産物が挙げられており、尾道の名産として扱われていたことをうかがい知ることができます。

尾道の漁師町としての性格は年中行事にも表れており、年末には鮓市、正月には魚市が開かれ、1月20日には漁師が神職を招いて漁業の繁栄を祈る神楽を行い、2月には鯛網が行われていました。

このような漁業を支えた漁具もまた尾道の中で製造されていました。江戸時代の中頃までは釣針は個人が作っていましたが、天保年間（江戸後期）の頃には釣針製造が一部の人々の手職となり、生活の支えになっていきました。

尾道では、当時釣針の生産地とされていた播磨国（兵庫県）から釣針製造の技術を持った嘉吉という人物が移り住み、釣針製造を始めました。さらに嘉吉の弟子たちが瀬戸内海の釣漁浦へ分散し、釣針を広め、多くの釣漁浦の発達に貢献しました。

近代になると、中国屈指の商業地であると共に瀬戸内海中枢の漁港となり、漁業者総数は386戸、一か年の漁獲高は20万円以上に達しました。

毎年4、5月の時期は魚島（鯛が盛んにとれる時期）と呼ばれ、岡山、神戸、大阪、京都等各地に輸送する鯛の量は鉄道貨車二百数十車、この量目25万貫余り、価格は15万円以上に及び、鯛以外の魚も同様の漁獲量を誇りました。その光景は美観、壮観を極めたと言います。



尾道港の鮓市（陰暦十二月十四日市）
明治時代・尾道市教育委員会蔵

戦前の瀬戸内海は高級魚（タイ、チヌ、サワラ、アジ）を豊富に供給していましたが、戦後の乱獲で激減しました。1936（昭和11）年をピークに下り坂になり、一方で戦後は引揚者も増えて漁業者は20万人から30万人に増加しました。

こうした中、尾道市農林水産課が昭和38年度事業として魚の養殖に踏み出し、「とる漁業からつくる漁業へ」転換がなされました。一時期は禁止漁具の底曳網（そこびきあみ）等の使用により、タイが幼稚魚期に乱獲されて急激に減少したものの、次第にマダイ、クロダイ、クルマエビ、ギザミ、ガザミ等の稚魚放流が効果を発揮するようになりました。

このような取り組みと共に、漁業者の高齢化にともなう漁業後継者の育成も進められ、2001（平成13）年4月には、尾道市漁業後継者クラブにより、安さで人を集めるのではなく、漁業者を支援して後継者を育てようという趣旨で、「第1回活魚直売市」が開催されました。

現在、当市は「スローフードのまちづくり」を目指して、尾道が誇る海の恵みや独自の食文化を引き継ぐ取り組みを市民や観光客を対象に行っています。市民に対しては、水産祭りを開催して地魚の魅力を発信し、学校給食にも取り入れています。

また、地元で獲れる魚介類の中から、漁業者が季節ごとにおススメの家庭料理を紹介する「尾道季節の魚20選のレシピ」を作成し、魚食普及活動を行っています。

観光客や市民に対しては、市内の飲食店のうち、地魚を取り扱い、その魅力を積極的にPRする店を「尾道季節の地魚店」として認定し、あこう（キジハタ）を食材にした特別メニューを提供する「尾道あこう祭り」の開催、年間を通して尾道の地魚を提供していく「ワタリガニ祭り」等が行われています。



吉和漁港にて
1954（昭和29年）5月中旬・土本壽美撮影

林芙美子の短編小説『風琴と魚の町』にも登場する「ばんより」です。尾道水道と並行する本通り商店街で、手押し車に魚を並べて売り歩きます。名前の由来は、漁獲物を夜に選り分けて翌日に販売した（晩選り）、夕飯用に販売した（晩寄り）ではないかと言われています。最盛期は市街地の各地で見ることが出来ましたが、現在はごくわずかになっています。

晩寄りの歴史は古く、豊臣秀吉が朝鮮へ出兵した際（文禄・慶長の役）、尾道からも多数の海民が従軍し、多くの戦死者を出しました。そして、残された多くの寡婦（戦争未亡人）に対して「魚類売買御免」の御墨付きが下されたと言われています。

このような言い伝えに関係するものとして、『尾道の民話・伝説』（2002（平成14）年・尾道民話伝説研究会編）に、「朝鮮半島の石」という次のようなお話が採録されています。

栄じいさんのおばあさんが大事にしていた石がありました。それは、秀吉が朝鮮出兵の際に、尾道からも船のこぎ手として18人の漁師が召し出された時、生き残った3人が外国に来た印にせめてと思って持ち帰った石でした。今もその石を神棚に祭っています。

豊臣秀吉の朝鮮出兵に尾道の漁民が従軍したことについては、1809（文化6）年頃の成立とされる「尾道漁村記」（尾道市立中央図書館蔵）に記載があります。同書は近世期の尾道の漁師町の伝承を書き記したもので、海民の由緒書きとして価値を見出されています。

同書によると、尾道から60人余りが漕ぎ手として従軍し、17人が戦死、16人の未亡人が残されたと記されています。



晩寄り 昭和30年代
土本壽美撮影

家船とは、家族ぐるみで船に住み、獲れた魚を売りながら海上生活をする船のことです。尾道周辺の家船は吉和（尾道市）、箱崎（尾道市因島）、能地（三原市幸崎町）、二窓（竹原市忠海町）、豊浜（呉市豊浜町）に見られました。

家船がいつごろからあるのかははっきりしませんが、瀬戸内海漁業の発祥の地といわれる能地が漁村として記録に現れるようになったのは江戸時代頃で、家船の本拠地になったのも同時期と言われています。

一方、能地の漁民に伝えられる由緒書「浮鯛抄」には神功皇后が朝鮮半島への遠征の途次に能地に立ち寄り、皇后が海に酒を注いだために浮き上がった鯛を献上した功績に、海のどこでも漁獲することの許しを与えたという説話が記されています。

また、当市吉和の漁民にも、足利尊氏が九州西走の際に、吉和の漁民が水先案内人を務めたことから、「御座船（内海のどこでも漁労ができる特権）」を与えたとされています。それを喜んだ漁民が踊ったという「吉和太鼓踊り」が県指定無形民俗文化財として現在も伝えられています。

1967（昭和42）年には漁民アパートと呼ばれた5階建ての集合住宅が建設され、漁民の生活様式に大きな変化をもたらし、家船は徐々に姿を消していきました。

しかし、本年の調査によって、吉和における最後の家船が確認されました。取り壊し間際のことでしたが、船主の方に聞き取り調査が行われ家船の図面も書き起こされました。



吉和漁港の家船 1957（昭和32）年
土本壽美撮影

行商船とは、戦前に備後特産のデベラやイロコ、豊表等を船で瀬戸内海各地に行商して回った船の事で、戦時中に物資統制が強化されるとともに止むを得ず行商は廃業し、急激に漁業者が増加しました。

しかし、戦後間もない1951（昭和26）年の地元紙「山陽日日新聞」にその復活が報じられています。当時、吉和漁協組合に加入する船の数は648隻に上り、広島・愛媛両県の限られた漁場の中であって漁獲量も減少し、このままでは深刻な生活難に陥るということで、行商船の復活が水産庁へ要望されました。

その後、行商船の売り上げが伸び悩み、毎年4～5月頃に訪れる魚島の時期だけ漁業者に転業する人々の姿も見られました。当時の「山陽日日新聞」には、行商船のほとんどが豊表、下駄、雑貨類を扱っており、長くて2か月、短くて2週間をかけて山口県、鹿児島県、和歌山県をはじめとする日本海側一帯を回っていたことが記されています。

行商船についての資料が乏しい中、2022（令和4）年に聞き取り調査が行われました。小学校の頃にご両親が営む行商船に乗り込んだ思い出を持つ方のお話で、元はタコ壺漁をされていたご両親が中古の行商船を購入してはじめられました。

積荷（商品）は倉敷方面から仕入れたゴザ、布団、毛布が主で、高根島から仕入れたミカン、桃、ブドウ等もありました。売る場所は、鞆の浦から今治の方に及ぶこともありました。

後年は広島市街を定位置とされたようで、広島湾から旧太田川（本川）へ入り、中区住吉橋のたもとへ船を泊めて商品をリヤカーに積み替え、母親がお得意さんのもとへ売りに出かけました。

この時、数隻のグループで向かい、それぞれの得意先を訪ねたり、なかなか捌けない人には手を貸すなど相互扶助的な光景も見られたということです。

旧筒湯小学校の漁具資料館

旧筒湯小学校内の漁具資料館は、1992（平成4）年に開館しました。旧市街地の小学校児童が年々減少しつつある中、増えた空き教室の活用が検討され、2年に及ぶ構想の結果、育友会、尾道漁協組合、山波漁協組合、尾道市水産課の協力で、学区内で盛んに行われていた漁業にまつわる漁具、魚市場の写真、漁法解説パネル、旬の魚一覧等が多数展示されました。

本展では、漁具資料館に眠っていた資料を一部お借りして展示しています。実際に使用されていた漁具を間近に、漁業水産都市を誇った尾道の歴史に触れていただければと思います。



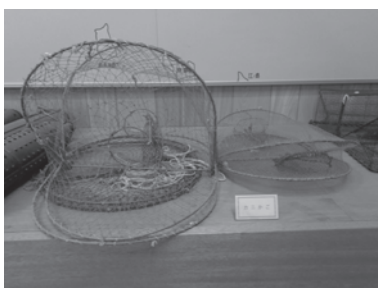
ウナギかご、アナゴかご



わかめこぎ



たこつぼ、イダコつぼ



カニかご



たこつり



エソ流しさし網